巻頭言

研究と医師の働き方改革

近畿大学再生機能医学教室
主任教授　梶　　博　史

医学部で活動する医師や研究活動を行なっている医師は，診療，研究，教育を両立して活動し，それぞれに成果をあげていく必要があります．診療，研究，教育に求められる成果が年々高まる中で，医学部の教員や医師は年々疲弊してきているのが現状です．さらに，平成３年６月に「働き方改革を推進するための関係法律の整備に関する法律（働き方改革関連法）」が成立し，年５日の年次有給休暇の確実な取得が義務付けられました．そして，令和６年４月から，医師に対する時間外労働の上限規制が適用されることになりました．限られた労働時間の中で，医学部では，診療，研究，教育をいかに両立していくかが喫緊の課題となっています．診療に係る時間の削減は難しいと思いますが，そうすると必然的に，研究や教育にかけることができる時間が限られていくことになります．昨今，我が国の科学研究力低下が問題となっていますが，それに関連して，医学部の若手教員の研究時間が少ないことが問題として取り上げられています．本稿では，診療，研究，教育，管理などの多くを抱える医学部の活動の中で，どのように研究活動を行なっていくかについて，私見を述べてみます．

これまで私は臨床系と基礎系，それぞれの活動の中で研究活動を行なってきました．大学院時代は臨床系ですが，学内の臨床の Duty を週２回（１回５－６時間）と，外勤半日を週３回こなしながら基礎研究を行なっていました．大学院修了後の関連病院勤務は４年ほどしましたが，患者データベースを作って臨床研究論文を書いていました．臨床系の大学教員時代は，教授と専門領域が異なる研究グループを教員としては単独で運営していましたが，研究以外の講座の臨床・教育活動の管理の多くを担当しながら，研究グループに入ってくれた少数の医員，大学院生とともに基礎研究の活動と臨床研究をしました．臨床研究は，特徴的な疾患群の十分な患者数を診療し，よく計画されたデータ集積をすれば，一人でも，時間がなくても，多くの成果を出すことが可能です．近畿大学赴任後は，基礎系教室の運営に加えて，教学部長など多くの管理・教育活動，カルシウム骨代謝・内分泌疾患の臨床・学会活動と，

大阪府大阪狭山市大野東 377-2（〒589-8511）
受付　令和６年８月21日

基礎研究活動の両立を行ってきました．これらの経緯から，私が，診療・教育・管理活動をしながら，厳しい時間制約の中で，研究活動を行ってきたことが推察できると思います．そこで，多くの業務をこなしながら，どのように活発な研究活動を行なっていくかという視点から，私が考えてきた指針を３つ述べたいと思います．

１つ目は，研究に対するモチベーションです．診療・教育・管理については，多くの状況では，自分の意志とは関わりなく，その活動をする必要があります．それに対して，研究活動は，大学院時代などの時期を除けば，多くは自由意志で取り組むことが多いと思います．その時に，「自分は研究を行い，それによって多くの人の役に立っていこう」とか，「多くの論文を書いて将来のキャリアに繋げよう」といった明確なモチベーションが必要です．そして，一つのモチベーションをしっかりと持って，忙しくてもそれを維持することが重要です．例えば，基礎研究は，重要な知見を見つければ，世界中の研究者の役に立ち，さらには，多くのヒトの診断や治療への貢献に何らかの形で繋がっていくことが期待できます．臨床研究は，国際共同研究ではない日本人のみの研究は，なかなか海外に認知してもらうのは難しい面もありますが，国内の研究であっても，国内での日常診療やガイドライン作成などに貢献できます．とにかく，診療・教育・管理に多忙でも，心の中では研究に Priority を置いておくことが大切です．良い成果を出せれば，研究は，人間社会への貢献度が高いのは確かです．

２つ目は，目標の明確化です．これは，最近は Vision という言葉がよく使われています．限られた時間，環境，人的資源，研究資金の中では，研究の適切な目標設定が重要となります．大学院時代では，指導教員の裁量に左右される面も多いですが，明確で単純な，出来れば現実に達成可能な目標を設定することが有効です．私の場合は，医局の先輩方に大学院時代に論文を10本以上出された方が結構おられた背景もありますが，直接の指導教員の先生から大学院の研究を始めた時に，「First author として10本論文を出せるでしょう」というコメントをいただきました．私は単純で素直なので，それを本気にして前述のような厳しい時間の中でできることをやっていましたら，実際に達成することができました．教員時代は，研究グループとして成果を出すことになりますが，継続的に，年間10本の論文を出すことを目標としてきました．これを達成できる年度は限られていますが，ブレのない明確な目標を設定することが重要です．

３つ目は，研究のプランと習慣化です．限られた研究時間で成果を出すには，本当にやるべき実験や分析をよく考えて絞り込み，少しでも早く論文を出せるように効率的なプランが必要です．研究時間が限定されれば，研究プランのセンスが必要になり，研究プランのセンスを磨くには常に効率的なプランを立て続ける経験を積み重ねることです．そして，忙しい中で研究を進めていくことを習慣化してしまい，研究を日常の生活活動のようにすることができれば理想です．人間は，しんどいこと，嫌なことは，忙しいほど続けることはできないし，成果も上がりません．したがって，研究を習慣化するには，研究を楽しむという精神が効果的です．医学部の教員は，Principal Investigator になると研究室の運営をしていくことになります．研究室運営の基本として私が心がけていることは，研究者が楽しく研究活動

を行い，その結果，多くのヒトが研究に参加し，多くのヒトが楽しく研究すれば，研究成果も増えて，研究資金も集まり，さらにそれを使って研究していくことで，研究室は好循環で運営されます.

以上，駄文ですが，少しでも皆さんの研究活動の参考になれば幸いです.